

# 戦国の天下人・三好長慶と阿波三好家

徳島市立徳島城博物館 森脇 崇文

## ◆はじめに

天下人（てんかびと・てんかにん）

「天下を取った人。天下の政権を握った人。」（『日本国語大辞典』より）

織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の、いわゆる「三英雄」がよく知られる

→ 信長は全国統一を成し遂げていないが、京都を含む畿内を実力で支配し、秀吉・家康への道筋を築いたことから天下人（＝政権）として評価される

… それでは、信長より以前にもその道筋を切り開いた人物は存在するはずでは…？

## 三好長慶（みよしながよし）

阿波国（現徳島県）出身の戦国武将。室町幕府のナンバー2・管領<sup>かんれい</sup>を務める細川家の家臣から身をおこし、主君の細川晴元、さらには第13代將軍の足利義輝をも追放し、畿内一円に勢力圏を築く

⇒ 信長に先がける「三好政権」の主宰者として近年注目される

## ◆三好氏の台頭

発祥の地 … 阿波国西端部の三好郡

鎌倉時代に阿波守護（地方長官）を務めた小笠原氏の庶流が、地名を名字として土着

⇒ 細川氏の分家にあたる「阿波守護家」の家臣として勢力をたくわえていく

15世紀中ごろの「応仁・文明の乱」 … 軍事的な手腕により三好之長<sup>ゆきなが</sup>（長慶の曾祖父）が台頭

→ 阿波守護家の細川澄元<sup>すみもと</sup>が細川本宗家に養子入りし、その後見役として存在感を発揮

→ 本宗家の別の養子との間で起きた当主の座をめぐる内紛に活躍するも、道半ばで敗北・自害

之長の死後、地位を継承したのは孫の三好元長（長慶父）

→ 細川家の内紛を勝利に導き、主君・細川晴元（澄元の子）の本宗家当主就任に貢献

→ しかし、後に晴元との関係悪化 ⇒ 晴元が扇動した軍勢に攻められ、堺で自害

## ◆長慶の飛躍

元長が亡くなった翌年（天文2年・1533）、阿波に逃れていた長男の千熊丸（長慶）は畿内に戻り、晴元家臣として復帰（当時11歳） ⇒ 以降、細川本家の有力家臣として青年時代を過ごす

摂津越水城（現在の兵庫県西宮市）に居城を与えられ、摂津国（現兵庫県東南部・大阪府北西部）の武士たちを取り込んで勢力を拡大していく……

天文17年（1548）、長慶は細川晴元に反旗をひるがえし独立、翌年には「江口の合戦」（現大阪市東淀川区）で晴元方を相手取り大勝をおさめる

⇒ 細川晴元は京都から没落し、彼を支持する足利義晴（前将軍）・義輝（現将軍）父子も同行  
＝ この時点で、三好長慶は畿内における政治権力のトップに躍り出る

#### ◆三好四兄弟の結束

長慶が躍進を果たした要因として忘れてはならないのが、3人の弟たちによるバックアップ

**長弟** 三好之虎（みよしゆきとら／法名・実休）

長慶が畿内に戻った際、阿波に残り阿波守護細川家の細川持隆に仕える

→ 天文22年（1553）、主君・細川持隆と対立の末に自害に追い込み、阿波の実質的主導者に

⇒ 以降、たびたび阿波勢を率いて畿内へ出兵し、長慶と協力して軍事行動をとる

本拠地は阿波守護家の政庁・勝瑞（現板野郡藍住町勝瑞）を継承

… 近年の発掘調査により枯山水や池泉式の庭園を備えた大規模な屋敷地の存在が明らかに

⇒ 「阿波の戦国大名」と呼ぶべきもう一つの三好氏権力

**次弟** 安宅冬康（あたぎふゆやす）

淡路国洲本城（現兵庫県洲本市）の水軍領主・安宅氏へ養子入り

→ 淡路の水軍を率いて畿内（長慶）と四国（実休）との連携に貢献する

**末弟** 十河一存（そごうかずまさ）

讃岐国（現香川県）の有力領主である十河氏へ養子入り

→ 地元讃岐よりも主に畿内で活躍、「鬼十河」の異名でも知られる武闘派

政治・軍事両面の困難を兄弟間の連携で補えたことが、長慶を天下人へと導く

#### ◆天下人・長慶

天文21年（1552）、将軍義輝は長慶と和睦して帰還するも、やがて再び関係が悪化し決別

⇒ 天文22年8月、幕府軍が京都から没落。将軍義輝は少数の同行者ととともに近江国（現滋賀県）へと亡命 … 再び京都は将軍不在に

將軍を排除した長慶は、和泉・丹波・播磨など畿内周縁の各地に出兵し、大きく勢力圏を拡大

→ 新たな將軍を擁立することなく、京都に近い摂津北部の芥川山城（現大阪府高槻市）へと居城を移転し、自らを畿内政治のトップに位置付けて活動

⇒ 室町幕府の役割を代行する新たな中央政權へ

長慶の權勢を象徴するエピソード

弘治4年（1558）正親町天皇の踐祚<sup>せんそ</sup>に際し、三好氏は朝廷と調整し2月28日に「永祿」へと改元

⇒ これに対し、亡命中の將軍義輝は無断での改元実施に反発 … その後も弘治の元号を使用

室町時代における改元は、朝廷と幕府との合意を形成した上で実施されるのが通例

⇒ 異例の「將軍外し」は、三好氏を武家の代表者とみなす朝廷の認識を示す

（後に織田信長が足利義昭を京都から追放した際も、直後に元龜→天正への改元を提案・実施）

足利將軍を推戴しない政治 = 長慶を主宰者とする「三好政權」が幕府を代替する状況

#### ◆晩年の長慶

永祿元年（1558）11月、足利義輝は三好長慶と再び和睦し、京都へ帰還

⇒ 「室町幕府」が保持する權威の利用を意図か … 實質的には三好政權が継続

永祿3年、長慶は河内守護畠山氏を追放し、居城を北河内の飯森城（現大阪府大東市）に移転

一方、南河内の高屋城（現大阪府羽曳野市）には弟の実休が入り、兄弟で河内を分割支配

⇒ 最盛期の三好氏は山城・丹波・大和・摂津・河内・和泉・淡路・阿波・讃岐に広大な勢力圏

永祿4年、和泉の岸和田城（現大阪府岸和田市）の十河一存が病で急逝

→ 永祿5年3月には、河内奪回をはかる畠山氏・根来寺との戦いで三好実休が討死

… その後、畠山氏の撃退には成功するものの、三好政權の先行きには徐々に影が…

永祿6年8月、長慶の後継者だった嫡男の三好義興が22歳の若さで病死

⇒ 空席となった後継者には十河一存の子・義継が養子入り（当時15歳）

永祿7年5月、長慶は唯一残る弟の安宅冬康を飯盛山城に呼び寄せ謀殺

… 背景は謎、当主を相続したばかりの義継の地位を万全にする意図？

この冬康謀殺をめぐる心労が長慶の死の原因になったともされる（「細川両家記」）

永禄7年7月、三好長慶は河内飯盛山城で死去（享年43歳）

#### ◆三好政権の落日

永禄8年（1565）5月、三好氏は京都において將軍義輝を襲撃し殺害 = 「永禄の変」  
⇒ 原因は諸説あるが、長慶の死で結集の核を失った三好政権の暴走とも…

永禄9年には政権の主導権をめくり重臣同士の内部対立が発生 … 泥沼の内部抗争  
三好三人衆（三好長逸・三好政生・石成友通） + 阿波勢 VS 松永久秀・久通父子  
（※当主の義継は当初三人衆方に与するも、永禄10年には松永方に離反）

永禄11年秋、足利義昭（義輝の弟）を擁して上洛した織田信長が入京  
→ 松永久秀・三好義継は幕府に臣従、三好三人衆らは撤退 = 三好政権の崩壊

その後、三好義継は義昭・信長との関係が悪化し、2年後の元亀2年（1571）に離反  
⇒ 天正元年（1573）、信長に追放された足利義昭を迎え入れて三好政権の復活を目指すも、居城の  
河内若江城（現大阪府東大阪市）を攻められ自害 … 三好本宗家の滅亡

実休系統の阿波三好家は生き残るが、阿波内部の紛争とそれを利用した土佐長宗我部氏の侵攻により  
天正10年（1582）に本拠地勝瑞（現板野郡藍住町）が落城、阿波の支配権を失う  
⇒ 当主の十河存保（実休の子・一存の養子）は天正13年（1585）豊臣秀吉の四国出兵後に讃岐で  
領地を得るが、翌年の天正14年に九州で戦死 … 大名としての三好氏滅亡

#### ◆おわりに

日本の中世から近世への移り変わりを語る上で、三好氏は軍事・政治の両面で欠かせない存在  
さらに、連歌や茶の湯など文化的活動でも大きな足跡  
⇒ 戦国の世に一時代を築いた三好氏の事績について、今後さらに研究・顕彰の進展が期待される

#### ■参考文献

天野忠幸『戦国期三好政権の研究』（清文堂、2010年）／同『ミネルヴァ日本評伝選 三好長慶』（ミネルヴァ書房、  
2014年）／天野忠幸『三好一族と織田信長―「天下」をめぐる覇権戦争―』（戎光祥出版株式会社、2016年）／馬部隆  
弘『戦国期細川権力の研究』（吉川弘文館、2018年）

資料編

「三好長慶画像」・「三好実休画像」は徳島城博物館平成13年特別展図録「勝瑞時代 三好長慶  
天下を制す」(2001)より、「三好長慶関係地図」は天野忠幸『ミネルヴァ日本評伝選 三好  
長慶』(ミネルヴァ書房 2014)より転載



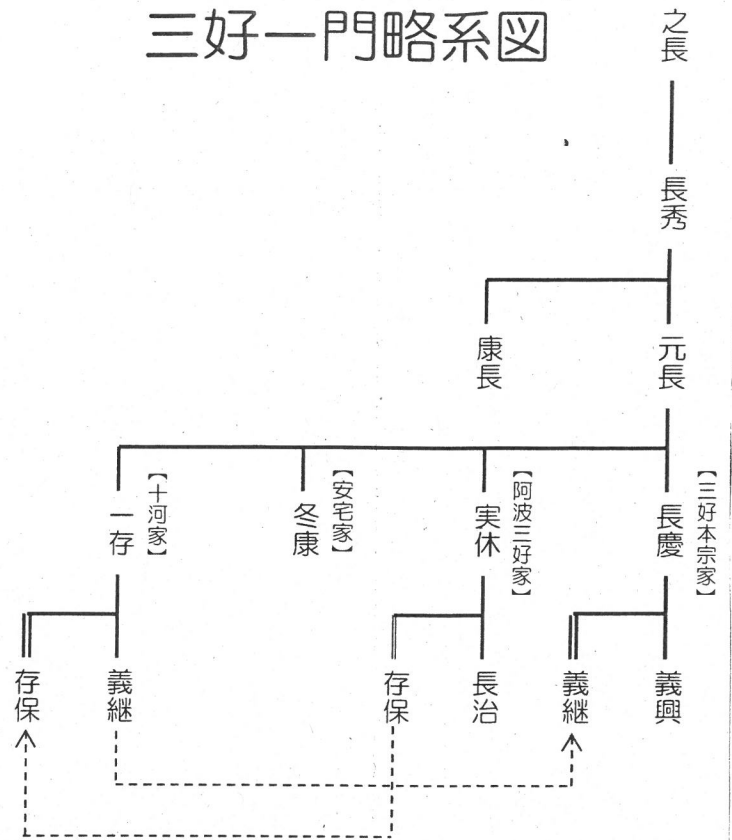
14 ◎三好長慶画像  
笑嶺宗訢賛  
室町時代  
大徳寺聚光院蔵(京都国立博物館寄託)





63 三好実休画像  
室町時代  
妙国寺蔵

# 三好一門略系図



※実線は血縁、二重線は養子相続、破線矢印は養子入りを示す

